

伝承文化をテーマとしたワークショップの プログラム作成

ー子どもの主体的な表現活動のための素材選びについてー

齋 藤 千 明¹

1, はじめに

栃木県では平成27年度より栃木県立美術館、栃木県立博物館、栃木総合文化センターの3館連携事業として統一テーマのもと展覧会やコンサート等を行っている。

平成29年3月に策定した、とちぎ版文化プログラム「リーディングプロジェクト」の関連事業として栃木県立美術館では展覧会に関連させたワークショップが企画された。

とちぎ版文化プログラムは、東京オリンピック・パラリンピックに向けてとちぎの魅力ある文化を国内外に発信するとともに本県文化の底上げを図り、地域の活性化に繋げる事を指針とし、その中の「リーディングプロジェクト事業」は全県的な機運醸成を図るために県が率先して事業を展開し県内各地の取組を牽引する事業である。

平成29年度は、県内の「烏山の山あげ行事」、「鹿沼今宮神社祭の屋台行事」が平成28年12月にユネスコ無形文化遺産に登録された事を記念して県立美術館、県立博物館、県総合文化センター3館の統一テーマが「祭」と選定された。

栃木県立美術館では祭りに関連する画題・意匠が描かれた作品、祝賀行

¹ 白鷗大学教育学部

e-mail : saitochiaki@fc.hakuoh.ac.jp

事に結びつく器や皇室への献上に縁のある作品など、寿ぎの美が表わされた自館収蔵品を紹介する展覧会・コレクション展1「特集 寿ぎの美術」が平成29年4月15日から7月2日の期間に開催された。

筆者が美術館より依頼を受けて企画立案したワークショップ「言祝ぎの音・鳥山和紙で太鼓をつくろう!」は、地域の行事、祭、文化財など伝統的な表現に触れ、「造形表現」「音楽表現」「身体表現」の3分野を組み入れた総合的表現活動を体験する試みで、協働表現することを通して自らの能力や可能性に気づき、感じた事を共有し、より豊かな表現につなげることを目的とした。

平成29年度3月31日改定幼稚園教育要領および保育所保育指針に示されている5つの保育内容領域のうち「表現」ではそのねらいを「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」としている。その内容の取扱いとして「豊かな感性を養う際に、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」「様々な素材や表現の仕方に親しむ」¹と新たに書き加えられた。古来、本邦では五感を用いて季節の気配を感じ、思いをはべらせ、和歌や俳句を詠む、絵を描く、草木から糸を染める、土から器をつくるといった様々な表現形態が存在する。五感を動員して得られる「気づき」や「心の動き」を子ども自らの表現活動に誘導するプログラムの有効性は、選定される表現用素材により大きく変動するものと思われる。

今回、美術館でのワークショップ開催にあたりフィールドワークを実施し、「表現に用いる素材」の適正について検証をおこない、いくつかの考察を加えた。

2, ワークショップ開催の経緯

平成29年1月中旬、「栃木県立美術館コレクション展Ⅰ特集 寿ぎの美術」展の担当学芸員より展覧会テーマ「祭」に関連させた内容で且つ、鳥

山和紙を造形材料に用いるワークショップの依頼があった。

この展覧会は、①《聖地巡礼ー蓬莱山・霊峰富士・日光》②《絵画にみる寿ぎのかたち》③《工芸にみる寿ぎのかたち》の3つのセクションからなり、各セクション10作品程、計32作品（前期・後期の会期で2作品の展示変えあり）の構成で、石川寒巖・小泉斐・五百城文・吉田博・小杉放菴・川上澄生・椿椿山・川端玉章・小室翠雲・石川寒巖・横山華山・川端龍子・島多納郎・小杉放菴・小堀鞆音・羽石光志・高久靄厓・濱田庄司・田村耕一・木村一郎・飯塚鳳齋・飯塚琅玕齋・飯塚小玕齋、以上22名栃木県に縁のある作家を中心とした展示である。（資料1²）

資料1

平成29年度 第1期 コレクション展示

2017年4月15日～2017年7月2日（☆印・第1期の新展示） 作品目録

【コレクション展Ⅰ 寿ぎの美術

前期：2017年4月15日～5月28日 後期：5月30日～7月2日】

作者名	作品名	制作年	材質技法	寸法 (cm)	備考
-----	-----	-----	------	---------	----

■ 1階展示室

《聖地巡礼ー蓬莱山・霊峰富士・日光》

石川寒巖	☆蓬莱仙境	1930年頃	紙本着色	153.5×56	
小泉 斐	☆富嶽全図巻	1801-1805年	紙本着色	34.3×1008.1	
五百城文哉	☆日光東照宮		紙、水彩	33×49.2	前期
吉田 博	☆東照宮、日光	1899年頃	紙、水彩	100×67.5	前期
小杉放菴	☆日光東照宮	1900年頃	紙、水彩	51×34	後期
五百城文哉	☆日光 本地堂 (薬師堂)	1900年前後	紙、水彩	49×66	後期
川上澄生	☆神橋	1950年頃	板、油彩(焼絵)	25.3×36	
川上澄生	☆陽明門	1965年頃	板、油彩(焼絵)	36×29.3	
川上澄生	☆眠り猫	1950年頃	板、油彩(焼絵)	29.3×36	
川上澄生	☆三匹の猿		板、油彩(焼絵)	14.4×21.1	

《絵画にみる寿ぎのかたち》

椿椿山	☆花籠 絹本着色			137.9×69.2
川端玉章	☆寿老・山水図		絹本墨画淡彩	101.7×33.7 (寄託)
小室翠雲	☆賦色紫桐丹鳳図	1939-45年	紙本着色	159.5×72.2
石川寒巖	☆子牛	1931年	紙本金地着色	170×366
横山華山	☆鍾馗		紙本着色	157×94.8
川端龍子	☆鐙矢		絹本着色	71.3×95.6
島多訥郎	☆菖蒲に鯉		紙本着色	47.7×56.9
小杉放菴	☆金太郎遊行	1944年	カンヴァス、油彩	150×136
小堀鞆音	☆詩歌管弦		紙本着色	154.4×368.4 (×2)
羽石光志	☆二上山	1975年	紙本着色	157×118
羽石光志	☆吉野宮	1984年	紙本着色	163.7×143.4
高久靄厓	☆歳寒三友図	1834年頃	紙本墨画 1	40×360

《工芸にみる寿ぎのかたち》

濱田庄司	☆絵刷毛目扁壺	1931年頃	陶	30×24.5×15.4
田村耕一	☆銅彩梅文大壺	1981年	陶	33.5×φ35.7
田村耕一	☆葡萄文角瓶	1979年	陶	27.5×12×12
木村一郎	☆練上壺	1955年	陶	26×φ34.5
飯塚鳳齋	☆花籃	1910-20年代	竹	24.5×φ28.5
飯塚琅玕齋	☆花籃 多福	1937年頃	竹	25.6×φ46.5
飯塚琅玕齋	☆花籃 靈峰	1944年頃	竹	24.5×44.5×26.3
飯塚小玕齋	☆瓢形箆目つぶし花籃	1975年	竹	32.4×φ16
飯塚小玕齋	☆竹網代まんじ繫文高盤	1976年	竹	12.5×φ48
飯塚琅玕齋	☆吊花籃 魚籃	1938年	竹	48×49×49

祭りに関連する画題で具象的に描かれた作品については、鑑賞の手がかりとなる展示テーマ「祭・寿ぐ・めでたい」と直結する。一方、祝賀行事

に結びつく器や皇室への献上に縁のある工芸作品については、子どもたちが関心をもって楽しく観ることが出来、なおかつ見方がより深まるような工夫が必要である。美術館では作品解説や音声ガイドのほか「親と子のための美術鑑賞教室」を開催し、言語活動を通してより良い鑑賞へと繋げている。今回行うワークショップでは、能動的な鑑賞を促すための表現活動からのリレーションについても留意して「素材」の選定を行う事とした。

筆者は、これまで主に江戸時代の浮世絵版画に代表される伝統水性木版画の素材・技法研究とその表現技法を用いた作品の制作発表を行っている。近年継続して制作している鳥山和紙や鹿沼産在来種こんにゃくから作られた糊を造形素材に使用した版画や立体作品等は、展覧会のテーマ「祭」の行事が開催される那須烏山市、鹿沼市と関連性が深い。

以上の事からまずは、「祭」の形象、伝承される素材からワークショップの素案作りを始めるためのフィールドワークを行った。

この段階で調査対象としておおまかに決めていたことは、下記3点である。

- ① 鳥山和紙（造形素材に使用できるかの検討）
- ② 「祭」のテーマに添った那須烏山市、鹿沼市の伝承文化（ビジュアル資料の収集、探索、ICT教材として活用の可能性を考える）
- ③ 筆者の造形作品、表現方法、技法材料などとの関連性

3， 那須烏山市調査概要

a， 鳥山和紙

那須烏山市で産する鳥山和紙の歴史は古く奈良時代、正倉院の書物にもその記述があり、1300年以上にわたり受け継がれてきた。明治時代の生産最盛期には紙漉きに携わる家が1000軒程あったが現在は福田製紙所一軒のみが伝統を受け継いでいる。

鳥山和紙はユネスコ無形文化遺産に登録された「山あげ祭」には欠かせない素材で、野外劇の背景となる「山」は竹を編んで作られた「あじろ」

に和紙を幾重にも貼り重ねて作製される。

「山」は、毎年当番町が丹精こめて祭りの2～3ヶ月前から新しく作り上げるもので前山、中山、大山の3枚からなり、最大の大山は、高さが10メートル、幅7メートルほどの大きさになる。大判の和紙を何百枚も使用できるのは、和紙の産地ならではの言葉よう。



(図1 大山の表：山水画が描かれている)



(図2 大山の裏：幾つかのパーツに分けて作り、組み立てていることが裏書きでわかる)

また、烏山和紙を代表する程村紙は、厚手で強靱な特徴をもち、茨城県大子町周辺地域で生産される那須楮を用いて漉かれる希少性の高い高価な和紙である。皇室の歌会始の懐紙に用いられることで知られており、下野国（栃木県）那須郡下境町（那須烏山市）小字程村（現在の卯の木）で作られていた事からその名が付けられた。現在、栃木県内の卒業証書のほとんどが福田製紙所で漉かれた烏山和紙を使用している。筆者が訪ねた1月の時期は、その卒業証書製作の繁忙期であった。

烏山和紙は、福田製紙所が運営する烏山和紙会館にて販売されており、程村紙をはじめ版画用和紙、染色紙、巻紙、インテリア雑貨など種類豊富に扱っている。その中で特に目を引かれたものが卒業証書を再生した和紙である。

福田製紙所によると毎年製作する卒業証書は約3万枚。その中で書き損じなども考慮し少し多めに作るので毎年幾らかの印刷済み卒業証書の余剰が出るとのこと。再生紙は印刷された文字を細かく取り除かずひとつのデザインとして残し、和紙工芸や梱包紙用に漉き返したものだとの説明であった。漉き返しとは、一度使用した紙を細かくほぐして溶かし再度漉いて紙にする製法の事である。古くから日本では文字の書かれた紙には言葉に宿る霊力があるとされ不要になった時には元の紙に漉き返すという慣習があった。そのような考え方のもと、故人の手紙などの反故紙（ほごし）を漉き返して写経用紙に使われた例などは供養であり仏教的な善を積むことでもあった³。

卒業証書の再生紙は、大きさは、四六判より少し小さい105×72cmで6匁から7匁（1匁=3.75g）の厚みがあり触感は再生紙としては張りがあり繊維の強度が保たれている。和紙の表面には黒い模様がちらちらと浮かび何かが飛びかい、流れているような、観ているだけで風景が想起されるような紙膚で、よく見ると所々にひらがなや漢字の文字が浮かび判読できる。（図3）



(図3)

展覧会名の「寿ぎ」は「言祝ぎ」とも記し、祝いの言葉を述べて幸運を祈ることやその言葉を意味する。このめでたき文字の浮かぶ再生紙が「ことほぎ」のキーワードで繋がることから、先ずはワークショップの主たる素材としてこれを選定した。

b, 山あげ祭り

那須烏山市で約450年続く「山あげ祭」は、道路上に大がかりな仮設舞台を設け、歌舞伎芝居を常磐津節のゆったりとした重厚な曲調に合わせて演じる八雲神社例大祭の奉納行事である。「山あげ祭り」の「山」とは(図1, 2) 烏山和紙で前述した山水を描いた「はかり山」の事で巨大な「山」を100人あまりの若衆が人力で持ち上げることから「山あげ祭」と呼ばれるようになった。

また、祭り最終日には各町の彫刻屋台がお囃子の激しさを競う奉納行事「ぶんぬき」が行われる。笛を合図に太鼓や鉦が徐々にそのテンポを増して鳴り響き、リズムの良さ、音の大きさ、力強さ、持続力を競い合う。激しい拍子と身体表現が一致した熱気あふれるお囃子合戦は、相手を「ぶん抜く」という意味から「ぶんぬき」と称されるようになった。

ワークショップの導入として参加者にこれらの映像と音を鑑賞してもらい、感得したリズムやうねりを造形・音楽・身体表現に反映させ得るかどうかを検討した。

4, 鹿沼市の調査概要

a, 今宮神社の屋台祭り

鳥山の「山あげ祭」と同じくユネスコ無形文化遺産に登録された「鹿沼の秋祭り」は、絢爛豪華な彫刻が施された囃子屋台20台ほどが街中を巡行する引き回しが行われ、交差点などで屋台が対峙するとお囃子を競う「ぶっつけ」の行事が行われる⁴。

先にも述べた鳥山の「山あげ行事」と共通する集団が一体となってお囃子の音、その拍子の勢いを競い合う奉納行事は、音と身体を同調させ個から集団に共振させて交渉を行う身体的コミュニケーションといえる。

b, 鹿沼こんにゃく

鹿沼市は、良質なこんにゃく芋の産地で江戸時代から特産品としてこんにゃくが製造されている。現在、全国の96%が品種改良された新品種のこんにゃく芋を生産している中、鹿沼市は「和玉」と言われる呼ばれる在来種のこんにゃく芋（図4）が栽培されている数少ない地域となっている。



（図4）

従来種は改良品種に比べてグルコマンナン含有量が多く、粘りが強くコシの強い歯ごたえのあるこんにゃく製品を作り出すとともに、食用以外にも伝統的にさまざまな分野で用いられてきた。特に和紙との関係は深く、精粉を糊として加工し和紙に塗布することで防水と強度が高まる。これを利用し古くは戦国武将の必需品である采配や和紙製の着物である「紙衣」、

さらに戦時中は気球の球皮に使われた⁵。

現在でも東大寺二月堂のお水取りで修行僧が自ら紙衣を作り着用することで知られている。筆者は、2008年の個展以来和紙にこんにゃく糊を塗布して作る強制紙を作品制作に取り入れて発表を行っている。(図5)⁶



(図5)

こんにゃく糊を和紙に塗布する際、糊の濃度や厚み、重ね方の違いで強度やその質感に変化をつけることができる。1枚の紙が堅牢な皮や、しなやかな縮緬のように紙膚の表情が変わるので単に接着剤としてだけでは無く用途は幅広い。

生のこんにゃく芋は刺激性がある。糊生成にあたり、擦り下ろしたこんにゃく芋が肌に触れるとかゆみや腫れを生じるのでゴム製の手袋を着用して作業を行う必要があるが、こんにゃく芋を乾燥して粉碎しマンナン粒子だけを精選した精粉を用いて作られる糊は、刺激性が無く安全に使用できることから造形素材としてたいへん便利である。

また、米粉、小麦粉、タピオカ粉などと違い、粘り気は強いが直接手を使って糊を塗布しても寒天やゼラチンのようなゼリーなのでべたつきが少なく扱いやすい。独特な素材感を楽しく味わいながら安全に素手で作業することができる。

5、フィールドワークからの「素材選定」と「題材作成」

那須烏山市、鹿沼市には、伝承される祭り行事のほか伝統工芸、特産物等さまざまな素材が多数ある。その中で「祭り」をテーマに行われる展覧会「寿ぎの美術」とワークショップの題材、筆者の創作活動の関連性を考え、4つの素材を選定した。

造形活動の素材としては、①「卒業証書の再生紙」、②「鹿沼のこんにゃく粉から作った糊」を使用する。

音楽表現・身体表現の素材は、③「烏山の山あげ祭り」、④「鹿沼の屋台祭りの音楽」の映像資料をもとに造形活動、美術鑑賞とのリンクも考慮し活用方法を検討した。

この4つを主な素材として造形活動から具体的な活動内容の計画を立てることとし、筆者の創作活動から和紙とこんにゃく糊を用いた作品、表現技法をピックアップした。

筆者は創作活動の中で伝承されてきた素材とそれを加工する技術、技法を作品に取り入れてきた。中でもこんにゃくの糊は、自身にとって創作活動の幅を広げるきっかけになった重要な素材の1つである。平成20年にこんにゃく糊を使用した強制紙の作り方を学び、和紙から紙衣や紙布といった着物に仕立てる伝統技法を用いた作品を発表し、さらに和紙に絵柄を摺る木版画のような平面作品の表現から立体作品、空間全体を利用したインスタレーションの表現へと展開させてきた。

これまで制作、発表した作品の中から今回のワークショップのテーマに即した活動として想起されたのは、平成28年9月にアーティスト・イン・レジデンス・プログラム⁷でアメリカ・ロサンゼルス18th Street Arts Centerに滞在し同施設内ギャラリーにて開催された個展での試みある。

この個展では、ロサンゼルス滞在中に筆者が経験し感じた事を「雲間から垣間見る」日本美術の伝統的な視点である「引き」で場景を可視化したインスタレーション作品「蒼穹鴉図－Crow's eye view of blue sky without water」(図6)を発表した。



(図6)

さらに多民族多文化社会において作者と鑑賞者をつなぐための非言語ツールとして打楽器、和紙ドラムを制作した。太鼓は、古くは時を知らせる、合図を送るなど伝達的手段としても用いられた。空気が乾いていれば高い音が湿っていれば低い音に鳴る。太鼓を敲き空間に響かせ「場」を感じる。そこで感じた事を言語ではなくリズム、音として表現する「音によるコミュニケーション」(図7)の試みである。



(図7)

今回のワークショップでもコレクション展1「寿ぎの美術」を鑑賞して感じた事、祭りの映像やお囃子の音、素材の触感から感じたことを造形活動で形に表わし、さらに敲いて音で表わす。そして音と身体を同調させ

る。造形・音楽・身体表現のそれぞれを表出させて統合された表現活動とする事を目標とした。

また「祭」をテーマにした展覧会で行われるワークショップであるがゆえに、「表現」の領域に限らず、平成29年度3月31日改定保育内容領域「環境」における内容「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」とその取扱い「文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること」とも関連し得るものである。よって、この鳥山和紙で太鼓をつくり音で表現するという題材は、地域社会における様々な文化や伝統・季節の行事に触れる際の感性や想像力の向上、ひいては自己表現への動機づけに繋がる素材でもと考えられる。

以上のことを踏まえ、このワークショップのタイトルを展覧会名の「寿ぎ」を言葉で祝う意味の「言祝ぎ」に変えて「言祝ぎの音」とした。

6、考察および結語

幼児教育において豊かな感性を養うためには、「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」、「様々な素材や表現の仕方に親しむこと」といったプロセスに着眼しつつ個々の感性と表現を育み、その資質・能力を踏まえて小学校の図画工作へと接続されることが望ましい。

新学習指導要領小学校図画工作科の「鑑賞」では、第1学年及び第2学年では自分たちの作品を楽しく見る、第3学年及び第4学年では身近な美術作品のよさや面白さを感じ取る、そして第5学年及び第6学年では、「親しみのある作品などを鑑賞する活動を通して、自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、生活の中の造形などの造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取った

り考えたりし、自分の見方や感じ方を深める⁸」とあり、子どもが発達に従って自分と近いものから社会へと興味を向けはじめ、鑑賞する対象も広がって行くとともに美術・造形に対する感性を開花させていけるようなサポートが美術教育に求められている。

子どもたちが我が国や諸外国の親しみ深い作品群などを鑑賞するためには、美術館の利用が最適である。美術館は、幼児教育、学校教育との連携を深め、「子どものためのワークショップ」、「ギャラリートーク」など教育普及活動を活発に企画し、幼児期から親子で参加できる機会を設けることが鑑賞教育にとって重要であると思われる。

他の教科を包括的に見てみよう。

音楽科では、我が国や郷土の音楽の指導に当たって、そのよさなどを感じ取って表現したり鑑賞したりできるよう指導方法の工夫を示している。また、これまで第5学年及び第6学年において取り上げられていた和楽器を第3学年及び第4学年においても新たに位置付けることとしている。道徳科では、「伝統と文化の尊重、国や国土を愛する態度」において「我が国や郷土の文化と生活に親しみ、愛着をもつこと」とあり、社会科では新たに「県内の主な文化財や年中行事が大まかに分かるようにする」という文言が第4学年で加えられた。国語科では、「我が国の言語文化に関する事項」の項で「長く親しまれている言葉遊びを通して言葉の豊かさに気付くこと」「昔話や神話、伝承などの読み聞かせを聞くなどして我が国の伝統的な言語文化に親しむ」と提示されており、全体的に日本の伝統と文化に関する強化が見られる。

平成29年7月23日、山あげ祭最終日に再び那須烏山市を訪れた。前年ユネスコ無形文化遺産に登録されてから最初の祭り開催とあり盛況を呈していた。しかし、地元住民へのインタビューでは少子高齢化の影響は著しく、祭りは6町が年毎に当番町を務める輪番制のため小さい町では祭りの運営の中心となる若衆100人を10代後半から40代の住民男性で構成することが難しくなりつつあるとのことであった。それでも「町」という共同体

のなかで子どものころから伝承文化の担い手として生まれ世代を超えて受け継がれていることが祭りを通して明瞭に見える。子どもたちにとって伝承する文化が生活と共にあるということは、日本人としての自己確立にもつながるのであろう。今後も継続的に、伝統と文化および伝承される地域素材を幼児教育の段階より取り入れることが重要と考える。

参考文献

- ¹ 文部科学省告示第62号 幼稚園教育要領 保育所保育指針
- ² 栃木県立美術館 www.art.pref.tochigi.lg.jp
- ³ 池田寿「紙の文化史」勉誠出版2017年pp.243-264
- ⁴ 柏村祐司「栃木のまつり」2012年
- ⁵ 竹内孝夫「こんにゃくの中の日本史」2006年pp.116-141
- ⁶ 齋藤千明「空蟬のかたち-2014- II」(950×610mm)和紙に水性木版、紙衣、コラグラフ、コラージュ、モノタイプ、2014年作
- ⁷ 18th Street Arts Center サンタモニカ市から助成を受け国内外からアーティストを招聘して滞在中の活動を支援するプログラム<http://18thstreet.org>
- ⁸ 文部科学省告示第63号 小学校学習指導要領